令和３年１月３０日発行
第５１７号

原町小だより「はらまち」

川口市立原町小学校
全校児童数３９９名

「なかよく」「かしこく」「たくましく」

ＨＰアドレス　https://haramachi-kawaguchi.edumap.jp/

「全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現」について

校 長　　加 田　明

テレビ朝日の「博士ちゃん」という番組があります。野菜やお城、盆栽など、毎回大人顔負けの知識を身につけた子供の“博士ちゃん”が登場し、お笑いコンビ・サンドウィッチマンと女優・芦田愛菜さんがさまざまなことを学んでいくバラエティ番組です。

１月９日の放送では、「生物の進化博士ちゃん」大塚 蓮（おおつかれん）さん（12 歳）が登場し、憧れの国立科学博物館で動物の標本や骨格を前に小学生とは思えない豊富な知識で博物館の学芸員や学者と対等に話をしていました。

縄文時代と弥生時代の人骨を見比べてその違いを言い当て、形の変化の理由を語る姿や、今後の日本人の顔がどのように変化するかまで論理的に説明する姿に博物館の先生も感心していました。

こういう子供たちが自分の興味・関心のあることをさらに追求し続けていけば、将来その道で活躍する貴重な人材になるのではないかなと思いました。

大塚蓮さんの夢は人のために役に立ちたいというのが基本にあり「体の不自由な方のために、義足や義手を作りたい」そして「医者になった後、宇宙飛行士になりたい」そうです。

さて、今までの学校教育では「みんなで同じことを，同じように」を過度に要求する面が見られ、学校生活においても「同調圧力」を感じる子供が増えていったという指摘があります。「言われたことを言われたとおりにできる」上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、「正解（知識）の暗記」の比重が大きくなり、「自ら課題を見つけ、それを解決する力」を育成するため、他者と協働し、自ら考えぬく学びが十分なされていないのではないかという指摘もあります。

そこで、文部科学省では中央教育審議会がこれからの新しい時代に必要な教育のあり方について

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して
～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～

と題する答申（令和３年１月２６日）を公表しました

９２ページにもわたる答申の最初の〈総論〉には次のような内容があります。

〈総論〉
（前略）急激に変化する時代の中で、我が国の学校教育には、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。（後略）

「個別最適な学び」とは、以前に比べて子供たちが多様化（特別支援教育を受ける児童生徒や外国人児童生徒等の増加、貧困、いじめの重大事態や不登校児童生徒数の増加等）しており、そういった支援が必要な子供たちも含め、全ての子供たちの学びの保障をしていくこと、そして子供自身が課題の設定をして、主体的にその課題を解決していく学びをサポートしていくことです。

学校は安全・安心な居場所として保障され、誰一人取り残さず、全ての子供たちが楽しく通える魅力ある環境であること、そして「博士ちゃん」のような子供の意欲を高め、その子供の持っている特性・可能性を伸ばしていける教育を実現していくことが必要であるということです。

そして「協働的な学び」とは、そういった多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力を身に付け，持続可能な社会づくりが行える力を育むことです。

新しい時代を生きる子供たちに必要となる資質・能力をより一層確実に育むため、子供たちの基礎学力を保障してその才能を十分に伸ばし、また社会性等を育むことができるよう、学校教育の質を高めていかなければなりません。